平和学習パンフレット

愛知・名古屋

私たちのまちにも戦争があった

～平和について考えよう～

愛知・名古屋 戦争に関する資料館

目次

1 はじめに …… 1
2 この地域の戦争について
(1)近代日本の戦争 …… 2
(2)愛知の空襲(名古屋の空襲、中小都市と軍需工場の空襲) …… 3
(3)戦時中の子どもたち(戦時中の学校、学童疎開、学徒勤労動員) …… 8
(4)東南海地震・三河地震 …… 11
(5)戦争と人々の暮らし(衣・食・住) …… 12
(6)敗戦 …… 14
(7)今も残る戦争遺跡 …… 15
3「愛知・名古屋 戦争に関する資料館」について …… 16

「愛知・名古屋 戦争に関する資料館」を運営する愛知県と名古屋市では、昭和38年に、県議会、市会において、「平和県宣言」、「平和都市宣言」が決議されており、その精神に沿って行政運営が行われています。

愛知県平和県宣言

戦争のない世界、原水爆脅威のない世界は、全人類の悲願である。
愛知県は、全世界の人々と手を携えて人類永遠の平和と幸福実現のために努力する平和県であることを宣言する。

昭和38年9月30日　愛知県議会

名古屋市平和都市宣言

宣言

世界恒久の平和を希求し、子孫に恵沢を確保するのは、全人類の悲願であり、われらが戦争を永遠に放棄したのも、この人類普遍の原理に由来する。
名古屋市は、原水爆の脅威から免れ全人類の平和と幸福を熱望する全世界の人々と相より相扶けて、人類永遠の平和確立のため努力する。右宣言する。

昭和38年9月18日　名古屋市会

1 はじめに

みなさんは「戦後○○年」という言い方を聞いたことがありますか。たとえば2020年は「戦後75年」といわれますが、「戦後」とは、どのような戦争の「後」なのでしょう？ 正しい答えはこのパンフレットに書かれていますので、みなさん自身で見つけ出してください。

さて、「戦後75年」ということは、75年もの間、私たちの国はどこの国とも戦争をしてこなかったということです。戦争とは人間どうしが敵と味方に分かれて争うことですから、勝っても負けても多くの犠牲者が出ます。犠牲者に国境はないのです。

20世紀以降の戦争では、兵士よりもはるかに多くの、武器を持たない人々が傷つき命を奪われました。いま私たちが暮らしている愛知でも、まちは焼かれ多くの人々が傷つき倒れました。その犠牲のなかから、戦争は二度とくり返さないという誓いをたて、多くの人々の努力と知恵で75年もの戦争のない歳月を重ねてきたのです。

いつまでもこの「戦後」が続くように、みなさんも戦争について学び、知恵を磨いてください。この小さなパンフレットと「愛知・名古屋 戦争に関する資料館」が、みなさんの「学び」のための入り口になればとてもうれしく思います。

愛知・名古屋 戦争に関する資料館（愛知県庁大津橋分室1階）

2 この地域の戦争について

(1)近代日本の戦争

70億といわれる世界の人々を1か所に集めるとすると、琵琶湖くらいの広さがあればよいそうです。そう考えると、よその土地を奪わなければならないほど、地球は狭くないはずです。ところが国や民族の違いにこだわると、ときに領土の奪い合いになるのです。

明治以降、日本は領土をめぐって多くの国と戦争を行ってきました。日清戦争(1894～95年)は、朝鮮半島の奪い合いであり、日露戦争(1904～05年)も、主な戦場は遼東半島とその背後の「満州」(現・中国東北部)でした。

日露戦争で、朝鮮半島を確保するのに都合のよい位置にある遼東半島を獲得した日本は、1910年、朝鮮半島を領土にしました。その後も1931年から45年まで戦争を続け、「満州」から中国、さらに東南アジアや太平洋へと戦場を拡大しました。

1931年生まれのある人は、生まれた時から戦争続きだったため、15歳で敗戦の日を迎えたとき、戦争に終わりがあることに驚いたそうです。15年続いた戦争のうち、1941年から1945年までの戦争を「アジア太平洋戦争」と呼んでいます。「戦後」とはこの戦争の後という意味です。

(2)愛知の空襲

名古屋の空襲

日本がまだ戦争を有利に進めていた1942年4月18日、アメリカ軍の爆撃機により、東京や神戸などの都市とともに名古屋に対する空襲が行われました。日本本土に対する初めての空襲でした。

1944年6月には、新たに開発された大型の爆撃機B29が日本本土を空襲するようになりました。名古屋では12月の三菱の航空機工場への空襲を皮切りに、以後何度も工場を狙った空襲が行われました。アメリカ軍は、まだB29の機数が少なかったことから、1万メートル上空からピンポイントで工場を空襲する作戦をとっていましたが、冬の日本上空で吹き荒れる高速のジェット気流にさまたげられ、決定的な打撃を与えることができませんでした。

空襲を受ける三菱重工名古屋発動機製作所
アメリカ軍撮影（中日新聞社提供）

当初、アメリカ軍の空襲の目標は軍需工場（兵器・爆薬・航空機など戦争に必要な物を作る工場）でしたが、次第に市街地を標的とする空襲も行われるようになりました。1945年3月からは、一度に出撃できるB29の機数が増えて大規模な空襲ができるようになったことや、夜でも飛ぶことのできる戦闘機が日本には少ないことから、アメリカ軍は目標と戦術を切り換え、大都市を夜間、低空から空襲することにしました。その最初が3月10日の東京の市街地への空襲で、一晩で10万人もの人々が命を奪われました。その二日後、名古屋の市街地も空襲され、その後もくり返し空襲を受けました。

爆撃機B29による空襲（1945年3月25日）（中日新聞社提供）
三菱発動機（名古屋市東区）を目標とした3月25日の空襲は、投弾が拡散したため、結果的に市街地に対する空襲になり、大きな被害がでました。

図を見てください。濃いピンクで塗られた部分は心臓の形に似ていますが、この名古屋の「心臓部」を狙った空襲は、1945年3月に2度行われました(12日、19日)。この「心臓部」は、名古屋城の城下町とほぼ重なります。江戸時代から人々が暮らしていた場所であるため、大きな軍需工場はありません。アメリカ軍の狙いは何だったのでしょうか？ 名古屋のような大都市を空襲する場合、アメリカ軍が目標を選ぶ手がかりは“人口密度”でした。アメリカ軍の目的は、人口密度が高く木造家屋の密集する市街地を手ぎわよく焼くことだったのです。

アメリカ軍が作成した名古屋の爆撃目標図(工藤洋三氏提供)

市街地に落とされた爆弾は、火のついた油脂をまき散らし、あたり一面を焼き尽くす「焼夷弾」というものでした。日本政府は国民に対して、逃げ出すことなく「火たたき」という簡単な道具やバケツの水などで消火することを求めました。アメリカ軍の実験では、焼夷弾から飛び出す火のついた油脂は90メートルも飛んだということですから、逃げないと、たちまち火の海に取り囲まれてしまいます。

名古屋市街地を標的とした空襲は、5月にも2度行われています(14日、17日)。その時の目標は3月に攻撃した「心臓部」の周辺地域(図の薄いピンク色の部分)で、「心臓部」に次ぐ人口密度でした。14日の空襲は名古屋城が焼けたことで

E46集束焼夷弾(模型)(愛知・名古屋 戦争に関する資料館所蔵)
焼夷弾そのものはM69といわれるもので、それを38発ひとまとめにしたものがE46集束焼夷弾です。投下からしばらくすると本体が分解され、38発のM69がばらまかれました。

知られていますが、アメリカ軍の目的は、密集した市街地に火災を起こすことであったため、名古屋城まで焼いたのは、アメリカ軍にとっても想定外でした。この5月の空襲により、名古屋はほかのどの都市よりも早く焼け野原となりました。

名古屋市内広小路通りから南にみた空襲後の様子（中日新聞社提供）

1945年5月14日の空襲により、炎上する名古屋城天守閣（撮影 岩田一郎氏）

中小都市と軍需工場の空襲

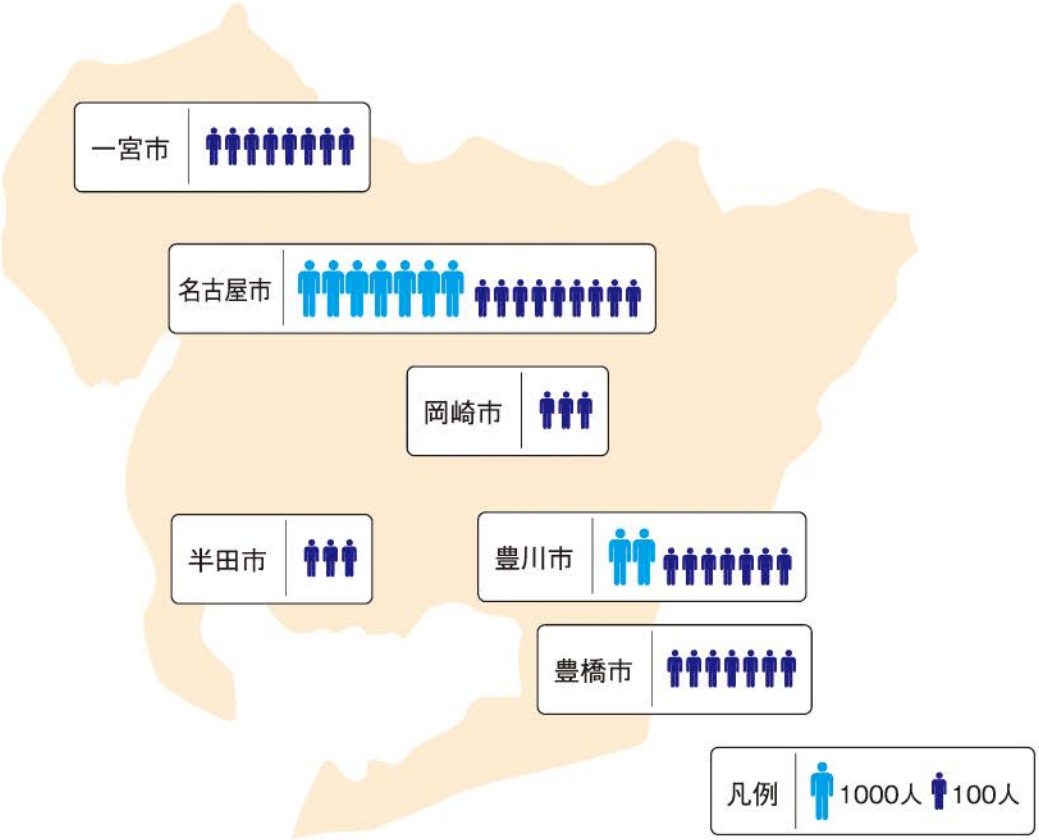
1945年6月以降、アメリカ軍は天気の良い日は軍需工場を、そうでない日は中小都市を空襲しました。軍需工場では、名古屋市熱田区の愛知時計（6月9日）［7ページコラム参照］や半田の中島飛行機（7月24日）などが、県内の中小都市としては、豊橋（6月20日）、一宮（7月13日、28日）、岡崎（7月20日）も空襲を受けました。

そして、広島に原子爆弾が落とされた翌日（8月7日）、豊川の海軍工廠（海軍直営の兵器工場）が空襲を受け、愛知の受けた1回の空襲としては最も多い2,600名以上が亡くなりました。日本が降伏するのはその1週間後であるため、戦争の終わり頃の空襲だったことになります。豊川海軍工廠は、おもに機関銃

や銃弾を生産していました。火薬を扱う危険な工場でしたが、三河地方だけでなく、愛知県内や他府県からも多くの生徒や学生が動員されていました。戦争が日本に不利になるにつれ、敵機の接近を知らせる警報が鳴っても、工廠側は、すぐには全員を避難させる命令を出しませんでした。そのため、この空襲で全員避難の命令が出されたときには、すでに爆弾が落ちてきていたと言われています。2,600名以上（その2割が学徒）もの多くの生命が失われたのは、兵器の生産を優先にしたという戦争末期の状況と無関係ではないでしょう。

空襲による死者は、正確な人数はわかりませんが、愛知全体で約1万3,000名、うち名古屋は約8,000名と推定されています。

愛知の空襲被害（各地の死者数）



※各地の死者数は、それぞれの市が発行している自治体史の記述を踏まえてまとめたものです。

＜参考文献＞「新修名古屋市史 第6巻」、「豊橋市史 第4巻」、「新編岡崎市史 4 近代」、「新編一宮市史 本文編下」、「半田の戦争記録－半田市誌別巻」、「新編豊川市史 第3巻 通史編近代」

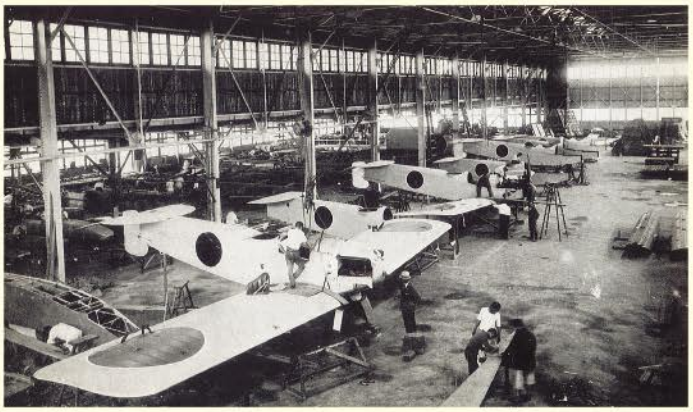
コラム 精密加工技術から航空機まで～なぜ名古屋は空襲されたのか～

1945年6月9日、名古屋市熱田区にある愛知時計（現・愛知時計電機）がアメリカ軍の爆撃機B29による空襲を受け、2,000名以上が亡くなりました。時計の会社がなぜ空襲を受けたのでしょうか？ この答えを探しに、少し歴史をさかのぼってみましょう。

江戸時代、木曽川などの水運を利用して名古屋に木材が集められるようになると、名古屋にはそれを加工する木工職人や、木工品に使われる金具を作る職人も集まってきました。明治時代になると、金具職人のなかから時計作りに挑戦する人が現れ、20世紀初め頃には、国内の時計の半分は愛知時計などの名古屋の工場で作られるまでになりました。

日露戦争の頃、愛知時計の精密加工技術に着目した海軍は、はじめは魚雷の発射管を、やがてさらに高度な技術が求められる航空機を発注するようになりました。当時の航空機は木製なので、江戸時代以来の木工技術をいかすことができたのです。1942年には、愛知時計の生産額のうち時計は1.6%にすぎず、それ以外は軍用機（軍で用いる航空機）などが占めていました。

愛知時計のほかにも、三菱の航空機工場も設けられ（港区に機体工場、東区にエンジン工場）、名古屋は軍用機生産の中心地となりました。名古屋がくり返し空襲されたのは、江戸時代以来の高い技術力をもとに、新たに航空機産業が急成長したからとも考えられます。



愛知時計電機株式会社機体組立工場（1927年）

(3)戦時中の子どもたち

戦時中の学校

戦争が本格化した1941年以降、日本国内から小学校が消えてしまったことを知っていますか？学校そのものがなくなったのではなく、それまでの小学校が「国民学校」と名前を改めたのです。ただ名前が変わっただけでなく、学校は天皇の国の民＝「皇国民」を育てる場となり、それにふさわしい体と心を鍛え上げる場となりました。教科としては体操や武道が重んじられ、科学技術の向上につながるような、基本的な科学教育も取り入れられました。子どもたちは年少の皇国民つまり「少国民」として戦争の仕組みのなかに組み込まれていったのでした。また、男子が学ぶ中学校以上の学校には軍人が配置され、兵隊としての基礎訓練である“軍事教練”が実施されました。

軍事教練に励む学生（中日新聞社提供）

学童疎開

太平洋やアジア各地の戦場で日本軍の敗退が続き、アメリカ軍が日本の都市を空襲する危険性が高まってくると、空襲への備えや消火活動に参加できない子どもや老人などを、ほかの土地に移すこと（疎開）が検討されました。その結果、国民学校初等科の児童（学童）に対する疎開（学童疎開）が決定されました。帝国議会（いまの国会）で提案した議員は、学童ならば教師の指導により統制がとれており、布団一つで疎開できるので荷物も少ないことなどを理由にあげていました。

1944年7月には名古屋などの大都市で父母向けの説明会が開かれました。疎開希望者は説明会の翌日か翌々日に申し出ることになっていたので(東京の例)、家族でゆっくりと話し合う時間もなく、8月上旬には、子どもたちは親もとを離れて疎開先に向け出発しました。

学童疎開には、国民学校の3年生以上が学校単位で疎開する“集団疎開”と、親せきなどを頼って疎開する“縁故疎開”がありました。集団疎開の費用は父母の負担だったので、家庭の事情で疎開できず、空襲の危険の迫る都市に残された子どもたちもいました。

大成国民学校(今の名城小学校)
疎開児童の出発(中日新聞社提供)

コラム 学童集団疎開

名古屋から集団疎開する場合の宿泊先は、県内のほか岐阜・三重・静岡の各県の寺院や旅館などでした。子どもたちは、初めのうちこそ遠足気分でいましたが、夜になって家恋しさから一人が泣き始めると、たちまちまわりの子どもたちに広がり、つき添いの先生も途方に暮れるばかりでした。

子どもたちが出発したのは夏でしたが、やがて秋が過ぎ、冬がめぐってきました。冬服も毛布もないために、寒さから毎晩おねしょをする子どもも少なくありませんでした。

食べ物もたりず、栄養失調や病気になる子どももたくさんいました。お風呂も毎日入れなかったため、ノミやシラミにさされてかゆさに苦しめられました。上級生や同級生にいじめられたため、線路を歩いて名古屋に帰ろうとした子どももいました。

このような集団疎開は、戦争が終わった後の1945年10月頃まで、1年以上も続きました。疎開中に空襲で両親を失い、帰る家もなくそのまま孤児のための施設に移される子どももいました。

疎開児童とお母さんの面会
(中日新聞社提供)

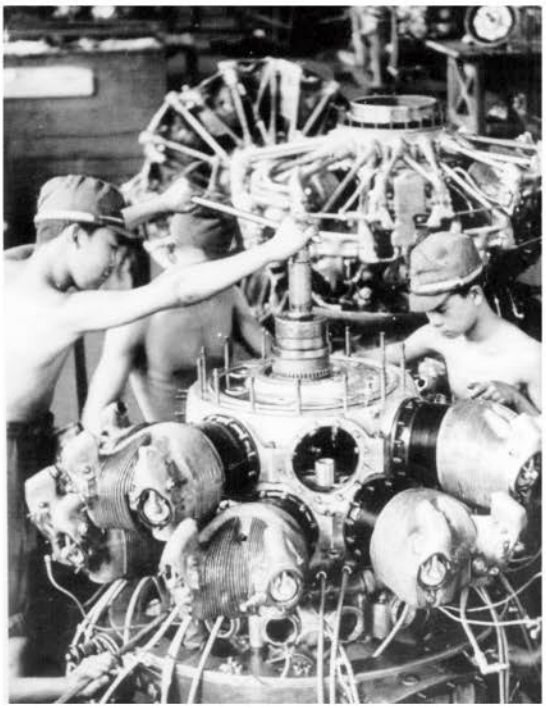
学徒勤労動員

戦争が激しくなると、兵器の増産を求められた軍需工場では、技術や作業内容を早く理解して勤勉に働く工員が大量に必要になってきました。そこで着目されたのが、中等学校（男子の中学校や女子の高等女学校など）から大学までの「学徒」（生徒や学生）でした。このように学徒を工場で働かせることを学徒勤労動員と言います。

愛知は航空機生産の中心地だったため、全国的にも早く1944年4月から学徒勤労動員が始まりました。最初は中等学校の3年生以上（年齢は14～17歳）が対象でしたが、やがて2年生以下や国民学校高等科（12～14歳）にまで拡大されました。その人数は、県内の中等学校だけで7万6,000名以上に達しました。

動員先は学校ごとに割り当てられ、大きな工場では、県の内外から学徒が集められました。初めのうちは学徒の安全への配慮がなされていましたが、やがて工員と同じ危険な作業や、深夜の作業をさせるようになりました。過酷な環境の下での長時間の作業は、病気や事故を招きました。さらに地震や空襲のときには、逃げ遅れて建物の下敷きになったり、防空壕（空襲を避けるために地下に掘られた施設）に逃げ込んだまま押しつぶされて犠牲となった学徒も少なくありません。勤労も教育ということで始められた動員でしたが、学校に戻れないまま授業もなくなりました。

学童疎開や学徒勤労動員により、学校の主役であるはずの生徒たちがほとんどいないなかで、学校は敗戦の日を迎えたのでした。



三菱発動機工場（名古屋市港区）で働く勤労動員の学徒
（中日新聞社提供）

(4)東南海地震・三河地震

1944年12月7日、熊野灘沖を震源とする東南海地震が発生し、愛知・三重・静岡の三県を中心に、死者は1,200名以上に及びました。

今ならビッグニュースですが、翌日の新聞には、目立たないところ【図版左参照：全4ページ紙面の3面】に「被害を生じた所もある」という小さな記事が載っただけでした。実は発生直後に、日本政府は全国の新聞社に、「被害は書くな」、「写真は載せるな」という命令を出していたのです。被害について敵に知られないためでしたが、アメリカの新聞は1面と3面で日本の地震を「中部日本で悲惨な地震」の見出しで報道していました【図版右参照：図版は1面】。地震波は6時間で地球を1周するので、世界中でこの地震が観測されたのでした。大きな災害のときは正確な情報が生死を分けると言われますが、戦争中は、国民にきちんとした情報が伝えられなかったのでした。

1か月後の1945年1月13日には三河地震が発生しました。死者は2,300名以上で、そのなかには三河地方のお寺で寝泊まりしていた名古屋の疎開学童も含まれています。危険な空襲を逃れてきたはずが、逆に疎開先で犠牲になったのでした。

東南海地震翌日の「中部日本新聞」(左)と「ニューヨークタイムズ」(右)の紙面(1944年12月8日)

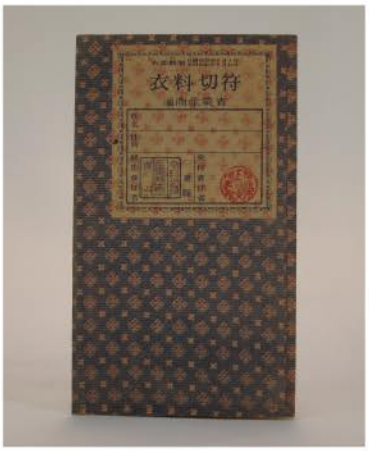
（5）戦争と人々の暮らし

戦争で勝つことが最優先になると、そのしわ寄せは人々の暮らしにあらわれます。「欲しがりません、勝つまでは」という言葉がまちのあちらこちらに見られるようになりました。そのような戦争中の人々の暮らしを、衣・食・住の3つの切り口から見てみましょう。

衣

戦争が長引くにつれて、暮らしに欠かせない品や道具が不足するようになりました。たとえば着る物は、お金に切符（衣料切符）を添えなければ買えませんでした。お父さんがスーツを1着作ると、その家の1年分の切符を使い切ってしまうため、子どもたちは服が破れても我慢です。衣服の素材も、破れやすい粗悪なものが使われるようになりました。戦争がさらに激しくなると、衣服そのものが店先から消えてしまいました。

暮らしから姿を消したのは衣服だけではありません。兵器に欠かせない金属が不足すると、台所用品からお寺の鐘にいたるまで、あらゆる金属が強制的に回収されました。瀬戸物で有名な愛知県の瀬戸では、陶器製のお金（陶貨）が作られました。敗戦のため実際には使われませんでしたが、金属製のお金までが消えてしまうところだったのです。



衣料切符（愛知・名古屋 戦争に関する資料館所蔵）

瀬戸で製造された一銭陶貨（個人蔵）

食

その頃の食生活は、今よりもずっと米に頼っていました。農家の働き手が兵隊にとられると米の生産量が減るため、値段は高くなります。政府は米の値段を抑えるため、強制的に米を買い上げることにしたので、農家は、自分たちの分以外はすべて差し出すことになりました。それでも米が足りず、麦などを混ぜて食べました。ある雑誌では、食べられる雑草とその調理法が紹介されていました。食生活の貧しさは、子どもたちの体格の悪化となってあらわれます。とくに学童疎開が始まった戦争末期には、子どもたちの体重は目に見えて減っていきました。

節米戰時食の作り方十五種

主婦之友　昭和18年11月号　表紙・記事抜粋
（愛知・名古屋 戦争に関する資料館所蔵）
戦時中の婦人雑誌。節米レシピが載っています。

住

空襲に備えて、都市では訓練（防空演習）が行われるようになりました。隣近所10軒ほどで一つの“隣組”がつくられ、訓練に参加するよう見張りあう仕組みになっていました。訓練は焼夷弾による火災から住まいを守るためのバケツリレーなどが中心でしたが、実際の空襲では、とても消火どころではありませんでした。

また、電灯の明かりが外にもれると空襲の目標になるという理由で、電灯にカバーをつけることなどが強制されました（灯火管制）が、アメリカ軍は巨大な火の玉のような照明弾を無数に落としたので、実際には効果はありませんでした。

防空電灯カバー（愛知・名古屋 戦争に関する資料館所蔵）
灯火管制では、普通は電灯を黒い布でおおいましたが、このようなカバーをつけることもありました。

(6)敗戦

1945年8月14日、日本政府は、日本に降伏を勧めたポツダム宣言を受け入れ、翌15日、ラジオを通じて国民に知らせました。

8月15日は「終戦の日」と言われていますが、本当にこの日に戦争は終わったのでしょうか。その頃の日本では、多くの人手を兵士などに取られたために農作物の収穫は落ち込み、そこに米の不作が重なりました。さらに、戦時中に国外にいた660万人もの兵士や民間人の帰国が始まったため、食料事情は極端に悪化しました。

当時、空襲で家を焼かれ、行き場を失った人たちが駅などで寝泊まりしており、毎日のように飢えや寒さのために命を落としていました。愛知でも、空襲でひどい傷を負ったために、戦後も不自由を強いられた人も少なくありませんでした。このような人たちにとって戦争の苦難は、8月15日で終わったわけではありません。

なお、名古屋市は2010年、戦災障害者に見舞金を支給する制度を創設し、2014年には「民間戦災記念碑」を設置しました。

戦争とは人間どうしが敵と味方に分かれて、命を奪いあい傷つけあうことであり、戦火はいまも地球上から消えていません。戦争のない世界の実現に向けて、これからも戦争と平和についての「学び」を深めていきましょう。

民間戦災記念碑(名古屋市千種区 千種公園)

(7)今も残る戦争遺跡

戦争遺跡は、近代(1868～1945年)の軍事施設や戦争に関わったもので、現在も残っている跡のことです。施設の敷地や建物、戦場のように、土地と切り離すことができないものを指しますが、兵器や器材、生活品のように、動かすことができるものを含める場合もあります。

名古屋城御深井丸にある旧陸軍の火薬庫です。

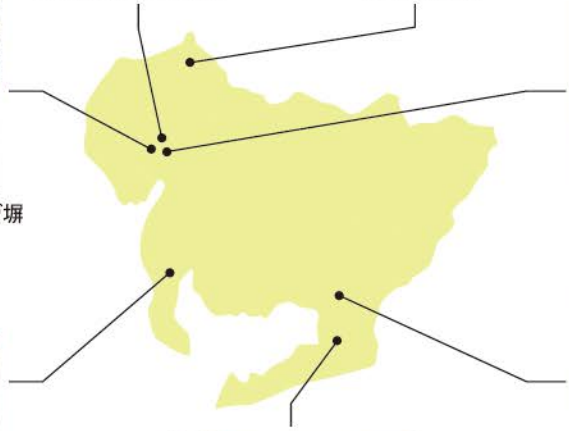
乃木倉庫
(名古屋市中区 名古屋城)

旧名古屋陸軍衛戍病院
(犬山市 明治村)

戦争中、兵器を作る金属が不足するとお寺の鐘にいたるまで、あらゆる金属が強制的に回収されました。

旧陸軍第3師団司令部のレンガ塀
(名古屋市中区二の丸)

石鐘
(名古屋市東区 圓明寺)



半田赤レンガ建物
(半田市)

戦時中に被弾した銃弾の跡が残っています。

旧陸軍第15師団司令部庁舎
(豊橋市 愛知大学)

豊川海軍工廠
(豊川市 豊川海軍工廠平和公園内)

火薬庫、信管※置場などが保存されています。
※爆薬を爆発させるための起爆装置のこと。

戦争遺跡には、どのようなものがあるの?

①役所、地方の軍隊、学校、研究所、演習場など ②要塞、飛行場、高射砲陣地、特攻基地など戦闘施設 ③生産、貯蔵施設 ④鉄道、道路、軍港など交通関係 ⑤病院、保養施設、俘虜収容所など ⑥陸軍墓地、海軍墓地など埋葬地 ⑦戦闘地や空襲被災地 ⑧忠魂碑や防空壕などがあります。

3 「愛知・名古屋 戦争に関する資料館」について

「愛知・名古屋 戦争に関する資料館」は、県民の皆様から寄せられた、戦争に関する実物資料の展示を行っています。

展示室には、地域性を重視した展示コーナーがあり、資料を通じて来館者自らが平和や戦争について考えていただく展示としています。

1 戦争に関わる地域史

このコーナーでは、名古屋空襲を中心に、戦前の都市化・工業化、戦中の動向など、この地域で起こった出来事に関する資料を展示しています。

E46集束焼夷弾の模型や、名古屋空襲のCG等もご覧いただけます。

空襲で変形した瓶

こんな資料があるよ!

空襲の炎で変形したビールのビン。空襲の炎や熱がどれだけ高温だったかがわかります。

2 県民の戦争体験Ⅰ（銃後※のくらし）

このコーナーでは、戦時体制下のこの地域における県民の生活や学校教育などの資料を展示しています。戦争が人々の暮らしに及ぼした影響を紹介します。

※銃後とは、戦場の後方。直接戦闘に加わらない一般国民のことです。

慰問袋

兵士をなぐさめ、はげますために銃後から送られた袋です。薬や食品などが入っていました。

こんな資料があるよ!

250キロ爆弾

1997年に南警察署（名古屋市南区）の工事現場から発見された爆弾。火薬を装填すると492ポンド（221.4kg）あったことから250キロ爆弾といいます。

3 県民の戦争体験Ⅱ（軍隊・戦地）

このコーナーでは、県民の軍隊生活や戦場体験などの資料を展示しています。当時の人々にとって軍隊に入ることや戦場に立つことがどのようなことであったかを紹介します。

千人針

戦場へ行く兵士の無事を願って女性が一人一個ずつ千個の結び玉を作って渡した布です。兵士はこれを腹巻きなどにして身に着けました。

こんな資料があるよ！

4 戦後の地域史

このコーナーでは、戦後改革、戦地からの復員、復興とまちづくりなどの資料を展示しています。終戦後の地域の様子や名古屋の街の変遷を紹介します。

パン焼き器のふた

パン焼き器のふたとして使用した板です。ふた以外にまな板としても使用していました。パンは主食である米の代用食として用いられました。

こんな資料があるよ！

5 企画コーナー

このコーナーでは、定期的に、戦争に関する様々なテーマでの企画展示を行います。

図書コーナー

戦争に関する本や子ども向けの絵本、愛知県内の地誌などを配架しています。

ビデオコーナー

このコーナーでは、常時、戦争体験ビデオの上映を行っています。上映中のビデオ以外のDVDも視聴できます。詳しくはスタッフにお声がけください。

愛知・名古屋 戦争に関する資料館

〈利用案内〉

開館時間 午前10時から午後4時まで

休館日 月曜日・火曜日（祝日は開館し、直後の平日が休館）、年末年始、
その他展示替え等による臨時休館あり ※夏休み期間無休

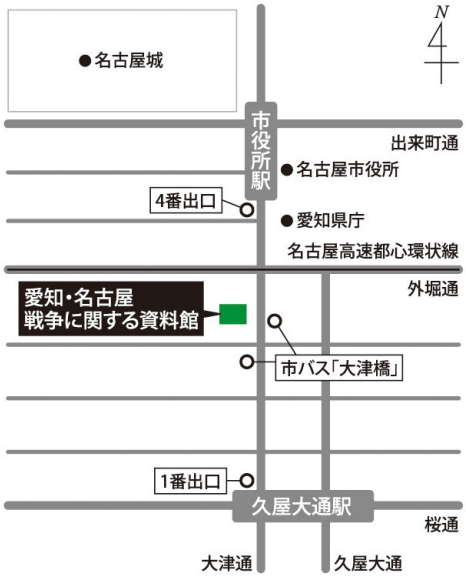
所在地 愛知県庁大津橋分室1階

入館料 無料

団体見学 5名以上の団体については、ご希望に応じて、資料館スタッフによる展示資料等の説明、
セミナールームの使用も可能です。（30日前までの事前予約）

〈交通案内〉

・地下鉄名城線「市役所」4番出口から南へ徒歩約5分
・地下鉄桜通線・名城線「久屋大通」1番出口から北へ徒歩約8分
・市バス「大津橋」から徒歩約1分
※駐車場はありませんので、公共交通機関をご利用ください。



お問合せ

住所：〒460-0002
名古屋市中区丸の内三丁目4番13号
愛知県庁大津橋分室1階
TEL：(052)957-3090／FAX：(052)957-3091

ホームページ

https://www.pref.aichi.jp/kenmin-soumu/chosakai/

※「愛知・名古屋 戦争に関する資料館」は、愛知県と名古屋市が共同で設置した「戦争に関する資料館運営協議会」によって運営されています。

愛知・名古屋 私たちのまちにも戦争があった ～平和について考えよう～

編修・発行　戦争に関する資料館運営協議会（名古屋市中区三の丸三丁目1番2号 愛知県県民文化局県民生活部県民総務課内）
監　　修　西形久司 伊藤厚史 笠井雅直（愛知・名古屋 戦争に関する資料館アドバイザー）

2020年7月 発行